美少女なんてありえない

サトイモ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
美少女なんてありえない

【Ｎコード】
Ｎ８９４９Ｚ

【作者名】
サトイモ

【あらすじ】
とある事情で友達も作らず、微妙に引きこもりになっていた少年、美里晶は中学卒業前に引っ越す事になった。
そして新居での翌日、目を覚ましたら何故か女になっていた。
アキラが男であった事を覚えているのは父と母のみで、住民票から戸籍まできっちりと女性扱いに。

男の時でもアキラＬＯＶＥだった父はおおはしゃぎで、母は冷静に女の子教育を開始。本人は混乱しつつ流されつつ『目立たないように過ごそう！』と決意する。

まったり続けて学園物～恋愛物にできたらなと思っております。

プロローグ

鏡をじっと見る。

ちょっと釣りあがった、大きな二重の瞳がこちらを見返してくる。

顔の輪郭はすっきりした卵型で、眉毛は太すぎず細すぎず。すらっと通った鼻筋に、何も塗ってないのにキレイなピンク色の小さい唇。

漆黒でつやつやな髪の毛は、前は眉毛にかかるくらい。横は軽く内に跳ねて頬に少しかかっている。後ろは背中の中間くらいまで伸びており、先っちょを軽く黄色いリボンで結んでいる。

父さんはかわいいかわいいとてもかわいいと、母さんは私に似てほんと～に美人ねえ、私に似てて、などと良く言ってくるので、恐らく可愛くて美人なのだろう。

Yシャツの第一ボタンをとめ、学校指定である一年生用の、緑色で短いネクタイを締める。濃紺で所々金色に縁取りされた襟元が大きく開いたブレザーを羽織る。

厚手の生地の上からでも十分にわかる大きなふくらみを、手でぽふぽふと持ち上げる。はっきり言って大きい。ぶっちゃけて言うと巨乳だ。人のを見る分には目の保養で済むのだろうが、自分にくっついているとなるとありていに言って邪魔なだけだ。

腰はやや詩的な表現をすると柳のように細く、お尻は大きすぎず小さすぎずにツンッと持ち上がっている。赤いフレアスカートの先からは、細くすらっとした長い脚。

なんか面倒になってきた。当然ながら肌もきめ細かくて美しいら

しいですよ?要するにかわいくて美人でスタイルも抜群という事らしいのだ。自分ではいまいち自覚できないのだが……。

「行ってきます」

母さんに一声かけて、表に出る。中学卒業を待たずに引っ越してきた、まだ二ヶ月もたっていないピカピカの新居を出て、テクテクと歩いて登校する。

この春から通っている光泉学院高校までは、住宅街を抜けて商店街～駅前通りを抜けるまで１５分、そこから更に１０分弱の、合わせて３０分かからない程度。自転車通学が認められている距離ではあるが、慣れないスカートで自転車に乗るという行為がどうにも不安だったので、諦めて徒歩で通っている。

学校に近づくにつれ、同じく登校中の生徒も増えてくる。他の人に目を合わせないで済むよう、目立たないよう、うつむき加減になりながら道を進む。別にいじめられている訳ではないデス。間違ってクラスメートに遭遇したりして教室までおしゃべりをする等という事態を避ける為の、自衛の手段なのデス。その他諸々もありまして。

チャイムが鳴りだすキッチリ１０分前に正門に到着。生活指導の先生が門の横に立っているが、近隣では名の通った進学校であり周囲の治安も良く生徒のモラルも高い事から、仕事がないと思われる。いや、授業も担当してるから仕事がないというのは言い過ぎか。その先生に軽く会釈をして正門を通過。

今日も何事もなく過ごせますように。変なボロを出さずに済みますように。目立たず、騒がず、ひっそりと。そうだ、今日は本屋に寄ってから帰ろうかな。と、一限さえ始まっていないのに帰りの事を考えたりしつつ下駄箱を開けると……。

ラブレター

誰かと間違えてたりしてないかな。というか間違いであって欲しいんだがな。
裏返すと、宛名が書いてありましたよ。

『美里　晶』様

様付けとは丁寧デスネ……。美里　晶。ミサト　アキラ。うん、オレの名前だ、間違いないです。

せめて女の子からならな……。いや女の子からでもどうしようもないけど。オレも今は女だしな。でも男と付き合う気はないな。元々そんな異性に興味はなかったけど、女になったから男と付き合いますとかありえない。友達さえ作らなかったのに彼氏とかホントありえない。ありえない……

というか少しくらい噂になっててもいいだろ、美里　晶は男に興味は無いって！オレは入学してしてから何人ふったと思ってる！？ああ、自分でも嫌なセリフだなこれ！俗に言うイヤな女だな！！オレが悪いのか？なにもしてないのに！大人しくしているのに！うう

うーー！！

「……今日は『オレに関わるなオーラ』を１２０％増しで出して過ごそう」

そうつぶやいて足取りも重く教室に向かうのだった。

プロローグ（後書き）

初投稿なので見苦しい点が多々あると思いますが打たれ弱いチキンなのでご容赦を。
微妙にリアル、微妙にファンタジーで行きたい所存です。

いきなり女なんてありえない

ピピピピッ！ピピピピッ！ピピピピッ！

目覚ましの音で目が覚める。休みの日でも規則正しく！がモットーの母さんの教育の賜物で、春休みとはいえ必ず7時には起きる事にしている。

が、正直つらい。昨日は引越しの片付けで色々と遅くまで荷物を上げ下げしたり、すぐ使う物を引き出したりでだいぶ疲れたし。目が覚めたとは言え半分寝てる状態だ。

ピピピピッ！ピピピピッ！ピピピピッ！

う～っとうなり声を上げながら目覚ましをストップ。ふあ～っと大あくびをしながら起き上がって腕を伸ばす。ん？なんか黒くてさらさらした物が視界に入るな、髪の毛…？

まあいいや、それにしても眠いから下に行って顔を洗ってこよう。なんか体が変だな？半分寝てるし疲れてるのはわかるけど軽くて重い？訳がわからないと思うけど、自分でもわからない違和感がある。

階段をトントンと降りる。なんか胸の辺りがぽよんぽよん跳ねてるけど何だろう？う～ん、まあいいか。ふあ～～～～～、とまた大あくび。ん？なんか妙に声が高いな。ま、気のせい気のせい……。

洗面所に到着。大きな鏡に広い洗面台。まだ3月になったばかりで水は冷たい。手で触れた時点で、お湯を出すかどうか悩んだが覚悟を決めて、えいっと顔を沈めばしゃばしゃと洗う。

ひ～！死ぬ、死んでしまう～～！などとアホな事を思いながらって何だこの長い髪は。まあいいや、これでバッチリ目が覚めたな。

タオルでごしごしを顔を拭いて鏡を見ると、何か女の子がいた。

たっぷり３０秒ほど女の子を眺めた後、まだ目が覚めてないんだな、と判断した。おかしいな、すっきりさっぱりぶるぶるさむさむしたのにな。もっかい顔を洗おう。

冷たい！もう春なのに冷たい！こんなんぜったい死んでしまうわ～～！などとバカなことを思いながらって髪の毛邪魔だな。まあいいや、今度こそ目が覚めたな。で、鏡を見るとやっぱり女の子がいた。

この子おっぱい大きいな、って女の子の胸をじろじろ見ちゃダメだな。鏡の中の女の子も視線が胸に行ってる気がするけど気のせいだ。あれだな、歯を磨くと目が覚める気がする。そうだ、歯を磨こう。

ハブラシとって～、歯磨き粉つけて～、水をふくんで～。怖いので鏡を見ないように俯いて一心不乱に歯を磨く。ごぼごぼごぼ……、ぺっ！お口すっきり。さて、鏡を（略

じーっと見る。右手を上げると左手が上がる。にっこりしてみる。にっこりされた。グーチョキパー。グーチョキパー。うん、アイコだね。

さらにじーっと見る。よおぉぉぉぉく見ると顔のパーツはオレだ。少し線が細くなってるが１５年つきあってきた自分の顔だ。女顔でよくからかわれたりいじめられたりもしたので、恥ずかしながら怖い顔の練習もしたことがある。結論としては怖い顔は無理だったので、表情を消して威圧的な雰囲気を出そうと努力して、こちらはプ

チ成功。オレに関わるなオーラを出せるようになった（つもり）のだ！ってどうでもいい。

髪の毛長いな……、腰まではいかないが背中の真ん中くらいまで伸びてるかな？正直バサバサとうっとおしい。一晩でここまで伸びるなんて何て非常識なんだ。いやそれ以前に……

「……なんで女の子になってるんだよ」

うげっ、声まで高い！高校生にもなるかってのに成長が遅いのか、声変わりもまだか？ってくらいオレの声は高かったのだが、これはマジで女の子の声だ。あっあー、あうあうあう。ダメだ、自分が出してる声だ。

次、胸。おっぱい。でかい。心なしか肩が重い。男の時は、というかつい昨晩までは自分の成長の遅さを気にして悩んでたのに何でこんなに育ってるんだよ！ホントにこれ自分のか？ちょっと触ってみよう。

ふにふに。ふにふに。やわらかいなこれ。ふにふに。ふにふに。触り心地はいいな。ふにふに。ふにふに。う～んくすぐったいな。ぐにぐに。ぎゅーっ。いててててっ！

堪能してしまった……。自分のだから興奮するとかは無かったけど。あったら変態だしな、うん。

次、下。あそこ。あそこっ！？うう、確認したくない。ここまでや

っておいて今更だが実感したくない。もう確定だから絶望する必要ないじゃん、ＹＯＵもう女の子だって認めちゃいなＹＯ！つか認めてたよＮＥ？五月蝿いよ！

ぱんぱん！（ドラ〇ンボール風に）　うん、無い。無いね……。さすさす。なんかすべすべしてるね……。ぱんぱん！あはっ……あはははは……

「お母さん！？おかあさーーーーーーん！？ちょっときてー！助けてえええええええええええ！！！！！」

もうすぐ高校生になる男？である所のオレは泣き叫んで母親に助けを求めた。

元から女なんてありえない

リビングに親子三人集合中。
ふかふかのソファーの上にあぐらをかいてゆらゆらと落ち着かないオレ。隣にはのほほんと、いつもと変わらない様子でお茶をすする母さん。向かいには腕と脚を組んで、目を閉じて深刻な顔をしている父さん。

いきなり息子が娘になってしまったからショックを受けるのは当然だけど、父さんそろそろ何かしゃべってくれないかなあ。当の本人が一番ショックを受けてるんだから。

ああ、でも母さんは落ち着いてたな。ぐしゅぐしゅ泣きながら洗面所にへたり込んでいるオレを見て、冷静に『アキラなの？』と確認をし、大丈夫だから安心しなさいと優しく背中を叩いてくれた。さっぱり要領を得ないであろう、オレの説明を辛抱強く聞いてくれた。

そして父さんを呼んで軽く説明、皆にお茶を出して今に至るといった訳。

ちなみに今日は月曜日。引越し後の手続きの為に休みをとったので父さんも家にいるという訳。同僚の事情により格安で建築中の家を手に入れられるという幸運が舞い込んだのが昨年１２月。
それじゃあ受験もこっちの高校で、と合格したのが２月。幸いにしてオレの学力は高く、新居の近くにレベルの高い高校があったのもラッキーだった。アホの子が多い学校だと揉め事も多いし。

会社での手続き関係で3月頭には住んでいたという状況にする為に卒業を待たずに引っ越し。母さんと二人で卒業式まで残るという選択肢もあったのだが、特に中学の人間関係に思い入れはなかったのでサックリとこちらに来た訳で。まさか目を覚ましたら女になるなんて夢にも思わなかったけど……。

「アキラくん」

うおっ、父さんがしゃべった。銀縁の眼鏡を指でくいっと持ち上げつつ、こちらを見つめている。外資系の結構良い所？のサラリーマンである父さんがそういうポーズを取ると、かなりエリートっぽく見えるな。

「いや、アキラちゃんか。僕の大好きなアキラくんが、こんな愛らしいアキラちゃんになってしまうなんて……」

うあっ、父さんきもい。エリート風のクールで知的な顔が、どんどんだらしなくなっている。ロリータ風のシュールで痴的な顔だな。って身の危険を感じる！

「桜花さん、僕本格的についてきたのかな！？アキラくんがアキラちゃんなんだよ！？ああ、もう我慢できない！！」

ガバっとテーブルを乗り越え、抱きしめてきた。ぎゃあああああ！く、苦しい！きもい！助けて母さん！父さんは男の時からオレに過剰なスキンシップをはかってきたちょっと危ない人だから嫌な予感はしてたけど案の定このざまだよっ！

「楓さん落ち着いて」

ドゴォ！！と派手に音を立てて父さんがふっとんだ。あれ？母さん今グーで殴った？しかもふっとんだ？

見なかった事にしよう。優しい母さんがグーパンチなんてする訳ないし、父さんも何事も無かったように立ち上がったしな。

「すまない、つい興奮してしまったよ。女の子のアキラちゃんが可愛すぎてついね…」

「あなた、それじゃ男の子のアキラが可愛くなかったように聞こえますよ」

「あああああああああ！そんな事は無い！そんな事は無いですよ！男の子でも女の子でもアキラちゃんは僕の大好きで愛してて人生そのものでうおおおおおおおおおお！！」

ガバッと再度抱きしめてくる痛い苦しいきもい助けｔ

「楓さん同じネタは連続でやっちゃダメでしょう？」

ドガンッ！！と豪快な音と供に父さんが吹き飛んだ。あれ？母さん今のは回し蹴り？ほぼ水平に飛んだ気がする。

気のせいだな。おしとやかな母さんが回し蹴りなんてする訳ないし、父さんも何事も無かったように立ち上がって座ったしな。

……眼鏡が割れているのは気のせいだ。

「アキラが女の子になっちゃったのは良いとして」

「よくないよ！」

「ああ、声もかわいいよアキラちゃんハァハァ……」

うあ、父さんマジきもいな……。っていうかオレ一言もしゃべってなかったな。そんなことより身の危険を感じるから母さんに引っ付いていよう。

「あら、甘えん坊ね。で、アキラが女の子になったのは良いとして」

「よくないよ！全然よくないよ！」

「桜花さんに擦り寄る甘えん坊のアキラちゃんもかわいいよかわいいよハァハァ」

「話が進まないから二人とも少し黙りなさい、ね？」

あれ父さんがふっとんでる。何も見えなかったぞ？母さんがやさしく頭を撫でてくる。でもなんか怖い。なんか手のひらから出てるよ！うん、黙っておこう。そうしよう。

「学校とか戸籍はどうしましょう？」

そうだ。当たり前だけど美里　晶は男だ。当然戸籍から住民票から保険証まで男で登録されている。受験の時も当然男だし。実際どうなるんだろう？戸籍がない？存在しない扱い？それ以前に元々の

男だった美里　晶はどうなるんだろう、失踪扱い？父さんと母さんがオレを見捨てる事なんてありえないと思うけど、実際問題どうしようもないのでは？実は性別を間違って書類をだしてましたー、で通るような問題でもないだろうし、親戚や顔見知りにはどう説明したらいいんだろう？

なんか気持ち悪くなってきた……。血の気が引き、なんかくらくらする。ふら～っと母さんにもたれかかってしまった。

「だいじょうぶよ、何があっても私達はアキラの事はちゃんと守るから」

「うん、安心しなさい。アキラちゃんは今まで通りで何事もないから、父さんに任せておきなさい」

１０分くらいだろうか。二人がやさしく頭を撫で続けてくれたので何とか落ち着けた。父さんもこうしているとまともなのになあ、母さんはやっぱり優しいなあ、でもそろそろ恥ずかしいな……。

「ありがとう、落ち着いた。でも実際どうしよう？」

「そうね、楓さん？」

「役所に忍び込んで書類を改竄するのはどうかな？」

小学生が脊髄反射で答えたようなアイディアが出てきた。あ、なんか涙も出てきた。

「じょ、冗談ですよ！？待ってください、今から真面目に考えるので！」

「楓さん……アキラが大変なのに空気を読まない冗談なんて」

「待ってください桜花さん！？何気にダメージが蓄積してるんです、勘弁して下さい！」

あ、やっぱり痛かったんだ。って気のせいでも見間違いでもなかったのか、母さんが父さんをぶっとばしてたのは……。１５年生きてきて初めて知る夫婦の真実。ガクガクブルブル……。

「今日住民票や本籍の変更やらをするつもりだったから書類は手元にあるのですよ、それでも見ながら少し考えます」

そう言って父さんが書類をガサガサあさっている。『私も一緒に見て考えます』と母さん。う～ん、やっぱり無理なんじゃないだろうか。女のオレは養子にしてもらうとか？でもそうなると元々のオレは…。う～んう～ん。脚をぷらぷらとふりつつ、取り止めも無い事を考えていると『あれ！？』と二人がすっとんきょうな声をあげた。ん、どうしたんだろう？

「アキラ、ちょっとこれ見てみなさい」

「どういう事なんだろうね～、ある意味楽でいいんだけど」

なんだろう？二人に手渡された書類を見る。住民票だ。前の住所に家族構成、世帯主、同居している人間の名前、年齢、性別。そこには……

美里　晶　１５歳　女

と書かれていた。

ゴスロリドレスなんてありえない（前書き）

サブタイにやや偽りありです。

ゴスロリドレスなんてありえない

性別の欄がある書類におけるオレの性別は、全て『女』になっていた。

「オレ、男だよね？」

「え？立派な女の子ですよ？」

「かわいいわよ、私に似て美人ね」

くそっ、二人そろってボケをかましてくるなんて……。

「男だったよね？間違いなく男だったよね？なんで全てが解決したような顔してるの！？」

「戸籍とか学校の手続きが解決したので、父さん安心しちゃいました」

「安心しないでよ！いきなり女になったんだよ？もっと色々と疑問を持とうよ！！」

「落ち着きなさい、あとソファーの上で立つのは危ないわよ」

むむ……。確かに自分だけ大騒ぎはみっともないかな。お茶でも飲んで落ち着こう。ズズズ……。ぬるい。

「家族以外で、アキラを知っていた人達に確認してみましょう」

お、流石母さん冷静だな。それは結構いいかも。

「じゃあ父さんに電話して聞いてみますよ」

父さんの父さん、おじいちゃんか。めったに会わないけど可愛がってもらったな。田舎に顔を出すとカブトムシ捕りにつきあってもらったっけ。

「もしもし？オレオレ、オレだけど」

「……切られちゃいました」

父さん死んでくれないかな。あ、母さんがまたグーで殴ってる。いい気味だ。

「すいません楓です。サーセン、ほんとサーセンしたっ」

なんか若者っぽいしゃべり方してるな。会話の内容まで聞こえないけど、今度は真面目にやってるみたいだな。

「ふう、お説教されてしまいました」

「あたりまえだよ、それでおじいちゃんどうだったの？」

「アキラちゃんのラブリーさを説明したら、凄くうらやましがって今度連れて来いと」

「そういうのはいいから」

親指を立てて得意げにしている父さんを、軽くひと睨みする。

「アキラちゃんもお年頃だから、悪い虫がつかないように気を付けろと」

「……それは要するに？」

「男が付きまとってきたら殴れと。もちろん、と答えておきましたよ！」

「答えになってないよ！まあ理解できたからいいや。おじいちゃんの中では、オレは元から女の子って事か……」

まだ断定できないけど家族以外ではオレは元から女の子と認識されてる？自分でも確認したいけど友達いないしなあ……。仮にいても、こんな変な事を説明するのは難しいし。

「私もかけてみるわね」

お、母さんも確認してくれるのか。父さんと違って安心できるな。

「もしもしお母さん？久しぶり。今少し大丈夫かしら？大した事で

はないのだけど……」

「うん、うん……。それで私が高校の時に、若気の至りで買ったゴスロリドレス……」

「アキラがどうしても着たいって言うの。着払いで良いから送ってくれないかしら」

全然安心できなかった。

若気の至りってなに！？ゴスロリ！？そんなもの絶対着たくないよ！！それ以前に母さんの高校時代にゴスロリとかあったっけ？

「すぐ送ってくれるそうよ、良かったわねアキラ」

「全然よくないよ！！」

「そんなに照れないでも。可愛い服を着たがるのは女の子として当然よ？」

「なんの話だよ！！あと女の子じゃないよ！！」

こんなに短時間で大声を出しまくるのは久々だよ、小学生以来じゃないかな……。二人そろって微妙にボケたおしてくれるので、非常に精神的に疲れた。

それともあれだろうか。父さんも母さんも実はショックで色々と混乱してるのだろうか？

「それはさておきね」

「他にもお古を色々送ると言ってたから。おばあちゃんもアキラの事は、元から女の子だったと思ってるみたいね」

「送らなくていい、と言っておいて」

「何言ってるの？せっかくだし、着られそうな物は全部送ってもらうわよ」

「なんで女物を着なくちゃいけないのさ！！」

「女だからよ」

身も蓋もないな。しかしおばあちゃんの中でも、オレは元から女の子という認識らしいから、どうやら家族以外は全てそういう事っぽいなあ。
ご都合主義というか、なんというか誰かの都合のよい風になっているというか……。少なくとも自分は女になりたいなんて思った事はない。犯人は父さんか？ありえそうだ！

その後二人で、オレを知っている親戚や知り合いに同じような電話をかけまくった。細かい所は略すが、オレは生まれた時から女の子でＦＡがでた。なんかどうでもよくなってきたな。あ、涙が……。

「アキラ、ゴスロリドレスは絶対に着てもらうわよ、あと他の服も」

「なんで！？」

「娘を着せ替え人形にして遊ぶのは、母の特権だからよ」

「はい！はい！僕はそれを撮影したいと思います！是非とも撮影させて下さい！」

着せ替え人形にして遊ぶってなに？母さんの顔がマジなだけに怖い……。ちなみに父さんは土下座でお願いしていた。

ウォシュレットなんてありえない（前書き）

トイレで丸々一話なんてありえないですね、短いですけど。
ソフトにしたつもりですが、生々しい描写もありますのでご注意を。

ウォシュレットなんてありえない

腹が減ってはなんとやらで、朝ご飯なぅ。

色々とあったので朝食というよりブランチな時間だが。

ブランチといっても、うちは朝は基本的に和風。ご飯に味噌汁に納豆に卵に焼き魚におひたし。うまいです。

微妙に現実逃避を始めてるのは自覚している。

「じゃあ父さんは役所に行ってきます、すぐ戻るからね！」

抱きついてきた。現実に戻された。だから苦しいって、おっぱいつぶれる！

『食事中に危ないでしょ』と母さんの右フックが、父さんのテンプルに炸裂した。そっちの方が危ないと思うけどなあ……。

食後はボーッとテレビを見る。月曜の昼間は面白い番組はやってないな。テレビ自体あまり見ない方だけど。現実逃避、現実逃避。

「アキラ、いつまでパジャマでいるの？いい加減に着替えてきなさい」

現実逃避を邪魔された。

着替えなんかよりもっと切実な問題を、一生懸命忘れようとしてた

のに。正確には我慢してたのに、だが。

トイレに行きたい。

実は結構前から限界に近かったが、思春期の男子として、行っていいやら悪いやらで、ひたすら我慢していたのだ。

あるべき物が無いからか、男の時より我慢がきかない気がする。しかし……しかしもう限界だ！母さんに相談しよう。

「……トイレいきたい」

「……いってきなさい」

顔を真っ赤にしてトイレいきたいと母親に訴える15歳男（笑）どうしてこうなったんだろう。やば、また涙が……。

「……」

「ついていってほしいの？」

「そんな訳あるかー！」

「じゃあ行ってきなさい、ちゃんと座ってするのよ」

「で、でもさあ……。その……あの……」

「自分の体だし、すぐ慣れるでしょ。漏らしたら写真とるわよ」

「いってきます！」

母さん容赦ないな！回れ右してトイレにダッシュ。

『終わったらビデを使うのよ、清潔で気持ちいいから』と母さん。はいはい、ビデね！

バタン！とトイレに駆け込む。えっと便座をおろしてと。見なければ問題ないな、問題ない。ズボンとトランクスをさっと下ろして腰かける。急げ！結構やばい！

「はぁぁぁ……。危なかった……。はふぅっ」

我慢しすぎたせいか、中々止まらない。やばかったなーホント。この年で漏らしてたら自殺物だったな。しかも写真。がくがくぶるぶる。

うう！？なんかおしっこが、口には出せない所を垂れていく感触が！？なまあったかくて気色悪いな。えーっと、ビデだっけ？

右手にあるウォシュレットの操作パネルを見る。このボタンか。お湯が出てアソコをきれいにするんだな。よし、押すぞ。押しちゃうぞ……。ポチッと。

「ひぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

オレはトイレで絶叫した。慌ててボタンをもう一回押して解除。ウ、ウォシュレットのくせにびびらせやがってえ……！

ついでに自分のも見てしまった。なんだ思ったよりショックは受けないな。細かい描写は割愛させてもらうが、なめらかな曲線で、きれいな気がする。変な気持ちにはならない。

「自分の体だし、そういう物と思えばなんとかなるかなー」

もう少し観察して調べてみたい気もしないでもないけど、やめておこう。うん、どうでもいい。やめやめ。もっかいウォシュレットにチャレンジだ、清潔にしないとな！

「んっ……これいいな、気持ちいい……」

結論としてウォシュレットは神だな。

外人さんが感動してブログに書く気持ちがわかったよ、クセになりそうだ。えーっと、あとはティッシュで拭いてと……。

何も無いってのは（正確にはあるが）やはり寂しいな。よしっ、完了！一人でトイレできたＹＯ！

あ、また涙でてきた。オレ今日何回泣いてるんだろ……。

リビングにいったら掃除をしている母さんが『気持ちよかった？』と言ってニヤリとした。

近くにあったティッシュの箱を投げつけたら、箒で打ち返された。

もういいや着替えにいこ……。

ウォシュレットなんてありえない（後書き）

なんか改行が反映されません、謎だ…

身体測定なんてありえない

クローゼットを開けたら洋服が全て女物になっていた。

という事は幸いにしてなかった。

良かった。持ち物まで改変されてて、ガソタヌのフィギュアがファンシーキャラのぬいぐるみになっていたとかじゃなくて本当に良かった。

ちなみにガソタヌとは、タヌキ型モビルスーツが活躍する大人気ロボットアニメだが、今はどうでもいい。あいつが大ファンだったな……。

どれを着ようかな。適当なシャツにジーンズでいいか。Tシャツと、薄青のコットンシャツをチョイス。黒のデニムジーンズと。

プチプチとパジャマのボタンを外す。胸が楽になった。ちょっときつかったんだよね。ズボンも脱ぐ。我ながらスラっとして長い脚。でも筋肉落ちてるか？ついでに腕も見る。むう……。

そういや身長はあまり変わってないな。袖口から覗く手足から推測して、だけど。オレはかろうじて１６０ｃｍのチビだけど、女になったら１４０ｃｍになった、とかいう事がなくて本当に良かった。

先にTシャツを着てと。胸のせいで微妙に丈が足りないな、どんだけでかいんだよ乳。気にしない。ジーンズをはく。む、おしりでつ

っかえるぞ……。でもいける。いけた！
途中でつっかえた割にはウェストは随分余ってるな。ん～、腰でぴっちり引っかかってるしベルトは無しでいいか。
コットンシャツを羽織ってボタンを留めていく。胸がきつい。ホント邪魔な脂肪だなこれ！仕方ない、第二ボタンまでは開けておこう。
靴下をはいて着替え完了。今回は泣かないで済んだ。ま、着替えただけだしな……。
ちょっと体力チェックしてみようかな。何かの本で見たけど、男性と女性では筋繊維の数は変わらないが、太さが最初から違うとかなんとか。そのせいで一定レベル以上では、どうしても差がついてしまうそうな。
こう見えても、何かあった時に男の意地を見せられるように、それなりに鍛えてたんだよね。容姿が容姿だったし、勉強だけだとなめられるから。
腕立て伏せ３０回くらいはできたのだ。腕を大きく開いて、ゆっくりと、胸が床に付く寸前まで上げ下げするってやつ。結構つらいんだよ？
よし、腕立てだ。
ぐい～……、ぷにっ。ぐい～……、ぷにっ。
よし、速攻で胸が床についた。

気にしないでおこう。は～ち！きゅ～う！じゅ～う！髪の毛が邪魔だな、あとで母さんに切ってもらおう。

「貧弱な坊や、ちょっといいかしら？」

「誰が貧弱だよ！」

ノックもせず入ってきて、そのセリフかよ母さん。

「かよわいお嬢さん、ちょっといいかしら？」

「……なに？」

めんどくさくなってきたので、普通に返事をした。母さんこんなキャラだったかなあ。

「下着を買ってきてあげるから、サイズを測らせなさい」

オレは逃げ出した！

だが廻り込まれてしまった。

「い、いらない！このままでも別に困ってないし！」

「ブラジャーしないと型崩れするわよ？あと肩凝り対策にもなるし」

へーへーへー、肩凝り対策にもなるのか。ってどうでもいい！

「とにかくいらない！男がブラジャーだのパンティーだの変態じゃないか！」

「女の子でしょ、ノーブラでトランクスの方がよっぽど変態よ」

「クラスで着替えの時とかどうなるかしらね？すっごい目立つわよ？あっという間に有名人よ？いいの？」

「走ったりすると揺れて痛いわよ？男の子にもじろじろ見られるでしょうね？それとも注目されたいの？」

目立つ。じろじろ見られる。有名人。注目。嫌な単語が羅列される。全てオレが望まない事だ。でも……。女性用の下着……。

「でも……、男のプライド的な何かが……」

「現実には女の子なんだから、それに合わせる努力をしなさい。母さんだって複雑な気分よ」

そっか、母さんも複雑な気分だったのか。仕方ないな……。こうなっちゃったら諦めて、見てくれだけでも女の子になる努力をするかな……。

俯きながらも『はい』と答えると、母さんがやさしく微笑んだ。

「わかってくれたのね。母さんも色々悩んでるのよ」

そっか、母さんも悩んでたのか。そうだよな……。いきなり息子が

女になっちゃうなんて。普通ならもっと混乱するよな。ごめんよ母さん、無駄に大騒ぎして取り乱して。

「どんな下着がよいかしらとか。かわいい系かセクシー系か、とか。あ、髪型も色々試して遊びたいし」

「服もちゃんとした所で買いに行きたいけど、まずは下着を揃えてからね。試着の時、店員さんに見られると困るし」

オレは大騒ぎして取り乱した。

ーーーーーーーーーーーーーーーー

「えっと、トップがきゅうじゅうの……」

「口に出さなくていいから」

「アンダーが……」

「だから口に出さなくていいから！」

「いいわね若くて張りもあって。形もいいし。母さんちょっと嫉妬しちゃうわね」

「だからそういうの言わなくていいからー！！」

身体測定なんてありえない（後書き）

主人公がちょっとキレすぎてるので次回は大人しくさせたい……。

姉妹だなんてありえない（前書き）

年始は更新できないかもしれません。
皆さん良いお年を。

姉妹だなんてありえない

母さんが黙々とオレの髪の毛をミツアミにしている。

横で縛ったり、ポニーテールにしたり、盛り？　にしたりと楽しそうだ。オレは退屈だけど。

どう？　気に入った？　と髪型を変える度に聞いてくるが、正直どうでもいい。

頭が引っ張られる感じでイヤなんだよな。切らせてもらいたいのだが、『絶対に許さない』『絶対に許さない』と無表情に2回も言われたので諦めた。

ちなみに下着の件は今日は許してもらった。

散々、サイズチェックという名目で陵辱を受けたオレは、割と限界だった。

半泣きになって『せめて下着は明日からにして下さい』と頼み込んだ。交換条件として髪の毛をいじられているという訳。

「これはどうかしら？」

「よくわかんない」

この1時間、オレの発言は「よくわかんない」「んー……、普通」「つっぱる感じがヤ」の3つくらいだ。

母さん不満そうだけど実際よくわかんないし！切らせてくれないかなあ……。

「母さんはポニーが良かったと思うのよ、お揃いだし」

と言いながらミツアミをほどき始める。

母さんの髪型はポニーテールで、色はちょっと茶色がかってる。顔立ちは似てるのかな？オレが少し釣り目なのに対して、垂れ目だけど。

「できたわ、お揃いお揃い」

うれしそう。

なんか格闘ゲームキャラの１Ｐカラーと２Ｐカラーみたいだな。攻撃力がだいぶ違うけど。高い方は言うまでもない。

「まるで姉妹のようね。お姉ちゃんって呼んでいいのよ？」

なに言ってるんだよオバサン。確かに外見は若々しいけどさ。

「まるで『　姉　妹　』のようね」

やばいな、思った事が顔に出たらしい。超怖い。

「お、お姉ちゃん……」

「あらやだ、お姉ちゃんだなんて。今度から外ではそう呼んでいいのよ？」

それは命令ですか。

「ただいまー」

お、父さん帰ってきたな。思ったより混んでたのかな？いつの間にか４時を過ぎてるし。

「ちょっと買い物したので遅くなってしまいましたよ」

と言いながら包み紙を開けてる。なんだろう、デジカメ？

「アキラくん写真集が昨日で完結ですからねー」

デジカメだった。テキパキと取り出して、こちらに向ける。

「今日からアキラちゃん写真集を作るにあたり、デジカメを新調してみました！」

パシャパシャパシャパシャ！

父さんきもい。パシャ！　写真集ってなんだよ。パシャ！　無駄遣いするなと言いたい。パシャ！　ええい、この短時間で何枚撮るんだよ！　パシャ！

「楓さん楓さん」

母さんがオレの隣に座る。

「おお！　まるで姉妹のようですね！　二人揃うと可愛さ2倍ですね！」

母さんご満悦。なんかポーズとってるし。オレにも強要するのはやめて下さい。なにその横チョキ。

「あ、メモリーが満タンになってしまいました」

早いな、おい！

「くくく……。僕のメモリーカードは１０８枚まであるのです」

どうでもよくなってきた。

ポニーは後頭部が引っ張られる感じでヤだなあ。母さんにほどいて良いか聞いてみるかな。

「母さん、もうほどいていい？　なんか頭がつんつんする」

「あら、似合ってたのに。慣れれば気にならなくなるわよ」

「んー、ダメだ気になる。いいでしょ？ほどいても」

「まあ十分遊んだしいいわよ」

よし！　ふい～、すっきりした。『プレーンアキラちゃんキター！！』と父さんが叫んで、またシャッターを切り始めた。きもい。

軽く頭を振る。長い髪がバサバサとうっとおしい。ん～、先っちょだけ縛れば頭もつんつんしないかな？
ポニーを結んでいたリボンで、毛先の方を一握りして縛ってみる。
あ、ちょっといい感じ。

「あら、悪くないわね。明日大きいリボンも買ってくるわ」

「アキラちゃんはどんな髪型にしてもかわいいですよハァハァハァ」

買わなくていい。あときもい。もういっかい頭をふってみる。うん、やっぱりいい感じだ。これでいこう！

ーーーーーーーーーー

母さんが夕食の準備をするとの事で、オレはお風呂掃除。父さんは編集作業だそうな。

凄く気になるけど、見せてもらうのも怖いので、写真集とやらはオレの中では無かった事にした。いつか忍び込んで消去しようと思う。

ちなみに家事は、父さんは基本的に免除。力仕事が発生した時だけ。なんだかんだで一家の大黒柱だしね。ゴミ出しとかお風呂掃除なんかをオレがやる事になっている。

お風呂か……。トイレでだいぶ免疫はついた自信がある。が、少し不安だ。どうやって洗えばいいんだろうか？

何となくだが、男の時と同じようにゴシゴシ洗えない気がする。恥ずかしいけど母さんに聞くべきかな？う～む……。

そういやまだ自分の裸もじっくり見てないんだよな。ちょっと見てみようかな、風呂場から出れば大きな鏡付きの洗面所があるし。

変な意味ではないです。好奇心です。自分の裸を見て、万が一にも鼻血とか出したらみっともないですし。なんでオレ丁寧語なんだろ。

洗面台の前に立つ。上半身から腰まで見える大きな鏡。

シャツ2枚をぱぱっと脱いでと。最後の一枚を……。ええい、男は度胸だ！

ん、鼻血は出なかった。つか冷静に見れるな。良かった……、のか？

細い首、きれいな鎖骨のくぼみ、その下にはお椀型のおっぱい。曲線を描いておへそ。腹筋一応割れてたのになあ、軽く縦にスジは残ってるけど。でっぱってないからいいか。というかキュッと締まってる。

「肩も凝るはずだよなあ、大きいわこれ……」

手で軽く持ち上げて見ると、ズシリと重い。やわらかいんだけどな。何が詰ってるのやら。

腰に手を当ててみる。細い。元から太ってはなかったが何でウエストだけこんなに細いんだ。女の子はみんなこうなのか？いや違うな、悪いけど。

中学の頃の、ちょっと太めな子の事を思い出して、何気に失礼な事を考える。

もっかいおっぱいを持ち上げて、鏡に近づいてじっと観察。

むう、なんか男の時より乳首とか乳輪？　が、おっきくなった気がする。むー……。

体を捻って背中を見ようとしたり、腹筋に力を入れたり、おっぱいをムニムニしてみたりと、色々観察を繰り返していた。かなり慣れてきた。自分の体だし、どうって事ないかも？

二の腕をつまんでぷにぷにしていたら、ふと視線を感じた。くるっと右に９０度。具体的には顔を右に向けて入り口を見ると……。

父さんがいた。

「や、やあアキラちゃん……」

「……」

硬直した。おっぱい丸出しで。

硬直している。片手にはデジカメ。

父さんが動き出した。オレはまだ動けない。

「ハイ、チーズ」

パシャリ。

ーーーーーーーーーーーーー

オレは生まれて初めて親を殴った。
飛距離は中々だった思う。

カレーにちくわなんてありえない（前書き）

サブタイに偽りあり。
カレーにちくわは、うちの母親がマジでやりました。感想は控えますが。

カレーにちくわなんてありえない

夕食はカレーだった。
母さん曰く『多少手を抜いてもバレない』との事で、ウチの食卓はカレー率が高い。
別に不満はないけどね。カレー好きだし。おいしい。

「桜花さんのカレーは最高ですよね。ね、アキラちゃん」

「今日はアキラちゃんの好きなチキンカレーですよ、良かったですねー」

「アキラちゃんの分、お肉少ないですね。僕の分あげましょうか？」

無視。ツーンとそっぽを向いて黙々と食べる。あ、でもお肉はもらっておこう。お皿を出す。ゲット。またそっぽを向く。

「ツンとしてるアキラちゃんもかわいいよハァハァハァハァでもお肉はもっていくのですねハァハァハァ」

またデジカメで撮影を始めた。父さんマジで変態なのかな。なんかどうでもよくなってきた。

「食事中にデジカメはやめて。母さんも何か言ってやってよ」

「食事が終わったら殴るから安心なさい」

撮影が終了した。

「ごちそうさまー」

部屋に戻って勉強でもするかな。その前にもう少し荷物整理か。PC早くネット繋がらないかなー、ゲームやりたい。面白そうな新しいネトゲを見つけたのだ。

「アキラ、後片付けをやってくれないかしら」

ん？珍しいな。家事は多少手伝ってるけど、台所は母さんだけで仕切ってたのに。別に良いけど、と答えると『じゃあこうやるのよ』と色々教えてくれた。

「水を切った後、軽く拭いて、お皿は一度ここね。ちゃんと乾いたらこっちの食器棚に」

「これはラップをかけて冷蔵庫のここに。これはタッパーに戻してここに」

「お玉はこっちね、他の調理器具はこの場所だから。覚えておいてね」

ふんふん、と頷きながら一緒に片付ける。なんか台所の説明を色々とされた。なんだろう？今までこんな事なかったのに。

まあいいや、深く考えないでおこう。

「ありがとう助かったわ。母さんと一緒にドラマでも見ない？」

「んー、部屋に戻って片付けする。勉強もしなきゃだし」

母さんの言うドラマって月9ってやつだしな。たしか恋愛物だったはず、興味ないや。母さんが不満げな顔で『アキラもこういうのにちゃんと興味を持ってくれないと……』とかブツブツつぶやいてる。なんかイヤな予感するな。さっさと部屋に逃げよう。

「アキラちゃん、絶対に消すのでメモリーカードは返してくれませんか？」

せっかく忘れかけてたのに蒸し返すなよ！

「絶対に返さない」

「他の画像も入っているのです、お願いしますお願いします」

「……返してもいいけど、父さんとは二度と口をきかない」

「そのメモリーカードは謹んで贈呈します、アキラちゃんのお好きなように」

弱いな父さん。そういえばオレに殴り飛ばされた後、『なかなかのパンチです。だが、我が家では二番目ですね』とか言ってたな。一番は母さんか。

なんか気の毒になってきた。あの画像だけ消してカードは返すかな……。

ーーーーーーーーーーーーーー

よし、だいたい片付いた。
勉強机には参考書。ＰＣデスクにはパソコン。本棚にはマンガと小説。ベッドは窓際。枕元には目覚ましとガソタヌフィギュアが一個。カレンダーがあってポスターの類はなし。
シンプルだな、うん。

枕元のフィギュアに目をやりながら少し昔の事を思い出す。
これをくれた友達。小学校５年の冬、いきなり消えるように転校していった、オレの親友。

体力もなく、女顔で、大人しい子供なんて格好のからかいの対象だ。
イジメとまではならなかったが、結構な頻度でからかわれれば、当然内向的になる。友達らしい友達はほとんどいなかった。
５年生になって、隣の席に座ったアイツが話しかけてくるまでは。
明るくて運動もできて、愛されるバカとでもいうべき性格のアイツは、当然人気者だった。ちなみに勉強は本当にバカだった。うん。

「お、隣がこんなかわいい子なんてオレついてるなあははー！　おじょうさんお名前は！？」

「……オレは男だよ」

「男だったのかあははー！　お前ガソタヌすき？」

「……テレビはみないから、しらないよ」

「じゃあサッカーやろうぜ！！」

「……あと5分で授業だよ！」

「やべ教科書ないぞあははー！　見せてくれ！」

バカだったなー……。

行動力のあるバカに振り回されてる内に、オレも段々と明るくなり、それなりに皆と遊ぶようになっていった。

カードゲームはすぐ上手くなったな。サッカーは最後までヘタだった。無理矢理ガソタヌのＤＶＤを見せられたな。公園で意味もなく走り回ったり、あれは疲れた。他にも色々と……。

そしてアイツは、オレを何故か一番の友達にしてくれた。オレも当然、アイツが一番の友達だった。……親友だったはずなのに。

「なんで、何も言わずに、転校してくんだよ……」

ベッドの上で膝を抱えながら思わずつぶやいた。

最後に会ったのは土曜日。日曜日には公園で集合な！と言って別れた。来なかった。月曜、火曜、水曜も。木曜日に先生が言った。

『ーーー君は転校しました』

ショックで一週間くらい、学校を休んだと思う。心配した母さんが転校の理由を調べてくれたが、わからなかったのか、オレには何も言わなかった。

他の遊び仲間は、徐々に慣れていった。アイツのいない状態に。オレはダメだった。元に戻っていった。アイツのいなかった頃に。

6年生のクラス替えで「元」遊び仲間とは別になり、中学に上がっては、学区の関係で顔見知りさえもいなくなり、と。

「今じゃネトゲ仲間だけが友達？　だよあははー」

そのネットゲームも、受験前に引退しちゃったけど。これだけボッチで寂しいリアルなのに、よくネトゲ廃人とかにならなかったなオレ。

家族がいたからだけど。家族以外には壁を作るようになったから、だと思うけど。

「どこかで元気にやっているのかな、アイツ……」

何気に、女の子に『パンツ見せてあははー！』と言うクセがあったから、痴漢扱いされて捕まってたり。

今のオレに会ったら、パンツ見せろとか言ってくるのだろうか。もし会えるなら見せてやってもいいけどな、トランクスだけど。

くだらない事を考えて、落ち込んだ気分を慰める。
勉強……する気もなくなっちゃったな。マンガでも読もうかな。

ーーーーーーーーーーーーーー

ゴロゴロと寝転がりながら一度読んだマンガをまた読む。まさにダメ人間。イカちゃんはかわいいなー。現実逃避できるかわいさだ。ゲソー。

「アキラ、そろそろお風呂に入りなさい」

現実に戻された。

「……一日くらい入らなくてもよくない？」

「生理でもないのに、お風呂に入らないなんて許さないわ」

いやな単語を聞いた。そのうちオレにもくるのかな。考えたくない。聞かなかった事にしよう。

「……洗い方がよくわからないから今度にする」

自分でも無理のある言い訳だと思う。つか言い訳になってない、あははー。

「母さんが一緒に入って教えてあげるわ」

「すみませんでした、一人でちゃんと入るので許してください」

冷静に考えればトイレであそこも見ちゃったし、風呂掃除の時に観察もしたしな。何も考えずにちゃっちゃと入ってこよう。

「男の子の時みたいにタオルでゴシゴシ洗うんじゃなくて、スポンジで泡を立てて、汚れを浮かせるの。一通り泡立てたら、髪の毛を洗って時間を置く感じね」

ふんふん。

「髪の毛は丁寧にね。頭皮だけは強めに指でよく洗って、他は揉むような感じで。シャワーでよくすすいだ後にコンディショナーよ」

めんどくさいな。

「せっかくキレイな肌と髪なんだからしっかり洗いなさい」

本人的にはどうでもいいんだけどな。

「……やっぱり母さんも一緒に」

やばい、考えてる事が顔に出てたっぽい！

「しっかり洗ってきます！」

脱兎のごとく風呂場へ。おっと下着とパジャマを忘れずに。なんか母さんがトランクスを見てる。超見てる。『サイズが合わなくても無理矢理私のを……』聞こえない！聞こえなかった！

ぽぽーんと男らしく素っ裸に。正確には髪の毛がひっかかったり、ジーンズが中々脱げなかったりしたけど。

バスチェアーに座って、手桶でお湯を体にかける。スポンジにボディソープを一押し、二押し。手で泡立てて、まずは首筋から肩へ。でもって腕と。どうもゴシゴシやらんと洗ってる気がしないなあ……。

背中はタオルじゃないと洗えないじゃないか。ボディタオルげっと。強くこすらないようにと……。

えーっと、おっぱい。無駄に出っ張ってて、柔らかくて洗いづらい。なんかくすぐったいし。ぷるぷると弾むので、片手で抑えて、円を描くようにして洗う。

持ち上げておっぱいの下も洗う。あひゃひゃひゃひゃ。いや声は出してないけどね。右乳終了。めんどくさくなってきた。

これ手に泡をつけて洗った方が早くないか？　という訳で手洗いに変更。ぐにぐにぐに。楽な上にちょっと面白いな。色々形が変わって。もみもみもみ……。

……なんか乳首が立ってしまった。別に変な気分になった訳じゃないのだけど。自分で思ってるより敏感なのかな……。泡で隠せ！

見なかった。ピンク色で、ツンと立ってなんていなかった！

お腹。おへそ。腰からお尻へ。お尻も男の時よりなんかやわらかいな。なんというかすごい丸っこい感じだ。尾てい骨のあたりを洗う時に、びりっとした感覚があって、またあひゃひゃひゃしてしまった。

次は脚。ちょっと開いて、太腿から下へと。う、屈んだら思いっきり見てしまった。ここは後だ、後。

太腿すべすべだな。ふくらはぎ。膝と体を折り曲げないとダメだな。おっぱいと太腿がむにむにあたって気持ちいい。これいいな。足首。足の指と……。

最後はアソコと。もう開き直ってるし、自分の体だから見る分には全然問題ないんだけど感触がなあ。全体的にふにふにしてて、くすぐったかったり気持ちよかったりで……。

終了。疲れた……。かなり疲れた……。あ、髪の毛洗わなきゃ。頑張ろう。体に比べればマシだと思う。

髪の毛をなるべく前に垂らして、頭からお湯をかぶる。鏡を見て一言。

貞子。クスクスクス……。プールに行く機会があったら一発芸として、是非披露しよう。行く友達いないけどね。

シャンプーを付けて、頭皮を指の腹で強めに揉んで泡立てて、それを髪に伸ばして、手のひらで揉むようにしてと……。水気が足りないなー。お湯をちょっとだけかけて、泡立てて、伸ばす……。

ここまで何分かかってるんだろ？　めんどい、マジめんどい。とい

うか風邪引いてしまうわー！

シャワー。あったかい。気持ちいい。泡が流れていく。軽く頭をごしごしとして、髪の毛を手にとって、よくすすぐ。

で、コンディショナー。使った事ないんだよな。えーっと、頭皮につけないように？　そんな危険な物を髪に付けるのか、女の人は。手のひらに出して髪の毛に塗り塗り。この髪の長さだとすぐ無くなっちゃうのではと思ったが、そうでもなかった。付けた後はすぐ流して良いのかな？　少しだけ待つか。

もっかいシャワー。危険薬品を塗ったので、さっきよりも厳重に流す。しかし水使いすぎじゃないかな？　ロングヘアーは環境の敵だと主張して切らせてもらおう。却下されるだろうけど。

やっと湯船だ！

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……」

色々ありすぎて疲れた心と体に湯が染みる。
ちょっとぬるいかな。熱いくらいが好きなんだよね。いつもどんどん温度を上げて我慢できなくなったら上がる、というスタイルだから。健康に悪い？　しらなーい。
当然次に入る人には熱すぎる訳で。だからお風呂はいつも最後にされている。

「……なんでいきなり女の子になっちゃったのかなあ」

心当たりがまったくない。中国の秘湯で溺れた事はないし、神様がでてきた訳でも、変な科学者に拉致られた記憶もない。
しかも家族以外には元から女の子という事になってるし、元が男だと知っているはずの両親も順応っぷりが半端じゃない。

それに自分自身もおかしい。色々と慌てたり恥ずかしかったりもしたが、既に慣れてきている。
仮にも昨日までは思春期の男だったのだ。正直成長は遅かった、声変わりさえまだだったが、それでもこっそりエッチな本を買う程度には男だったのだ。
そういう気分にならない。いくら自分の体だとはいえ、どうにもおかしい。他の女の人の裸を見れば、少しは反応するのだろうか。

「考えてもしかたないかー……」

だいぶ湯だってきたので出よう。

浴室の備え付けの、少し湿ったタオルで軽く体を拭いてから出る。
出口の足ふきマットを踏み踏み。洗面所の近くにかかっているバスタオルを取って、全身の水気をぬぐう。髪の毛を拭きながら鏡の前に。

女の子が映っている。長い髪、小さな顔、大きな胸、細い腰。
客観的に見れば、可愛らしくて、かつ良いスタイルなのだろうか？
基本的なパーツは自分なので、どうにも判断しかねる。性的な物も感じない。

自覚がないだけで、精神的にも女の子になっているのだろうか？
たった一日で？　わからない。わかりたくない。

「男を見て興奮できるか試してみようか？　あははー……」

鏡の中の女の子が自嘲的に笑った。泣き顔にも見えるけど。

暗くなっていてもしょうがないか。とりあえず服を着よう。母さんのあの様子だと、明日絶対に女物の下着を買ってきて、着せられるんだろうな。憂鬱だ…。
更に暗くなった。ええい、着替え着替え！

タオルをハンガーにかけて、着替えの置いてあるカゴの前に。下着を手に取ったタイミングで、何故か洗面所に入るドアが開けられた。

デジカメを片手に持った父さん
下着を片手に持ったオレ（全裸）

うん、男を見て興奮できるな。別の意味でだけど。

「お風呂上りの火照ったアキラちゃんを是非とも撮りたくてですね」

「……で？」

「中々出てこないので、もしかして何かあったのかと」

「……」

「何もなさそうで安心しました！」

パシャリ。

あるよ。ありまくりだよ。どうしてくれようか。オレが殴っても大して効かないだろうしな。
そうだ、この手はどうだろう？　ちょっと恥ずかしいけど女の子なら問題ないな。うん、オレ女の子だし。

「きゃあああああああああああああ！お母さん！おかあさーん！！」

うん、我ながら可愛い悲鳴だったな。

そして、リアルで空中コンボって可能なんだ。母さんマジすごい。

カレーにちくわなんてありえない（後書き）

一応『アイツ』の名前その他は考えてあります。いつになったら出せるやら、ですが……

寄せて上げるなんてありえない

目を覚ましたら男に戻っていた。やったー！

という夢を見た。ちょっと期待してたんだけどな。

『戦わなきゃ、現実と』と、頭の中で青いタヌキもどきが囁いた。うるさいよ！

目覚め自体は快適だった。寝る前に筋トレとストレッチをたっぷりしたし。

特にトレーニングには熱が入った。オレもいつか空中コンボができるようになりたい。努力しよう。

顔を洗ってダイニングに行くと、父さんはもう食事を終える所だった。着替えも終わっており、すぐにでも出かけられる格好だ。早いな、会社も近くなったはずなのに。

挨拶をした後、その事を訊ねると、絶対に定時であがりたいので、早めに出社するだそうな。残業させられればいいのに。

ちなみに昨夜の一件で、デジカメは奪っておいた。ガチ泣きしてたが、しったこっちゃない。

「出社前に、朝のアキラちゃんを一枚」

パシャリ。

以前のデジカメだった。速攻で取り上げた。涙目になってるな。

『またカメラ買ってきたら、来月のお小遣いは無しよ』と母さん。

泣きだしたよ、いい大人が。そのまま出て行った。いってらっしゃ

い。
このデジカメどうしよう、2台もいらないな。母さんにあげよう。

「ごちそうさま」

今朝は、ご飯に味噌汁にノリにベーコンエッグにお漬物だった。お昼は夕べのカレーだろうな、楽しみだ。一晩たったカレーウマー。
歯磨きして、トイレにいって、着替え。んー、スエットでいいか。ゆったりしてて楽でいい、パーカーでも羽織れば、外に出てもおかしくないしな。引きこもる予定だけど。
グレーのスエットに着替えた。本当なら軽くジョギングでもしてきたい所だけど、まだ外を出歩く気がおきない。勉強するかなー。

うーん、学校指定の教科書が無い状態だと効率悪いな……。適当に買った参考書や問題集だけじゃいまいちノリが悪い。中学の復習メインに切り替えるかな。
仕方ない、明日お願いして教科書だけは買いに行こう。たしか送られてきた書類にどこで売っているか載ってたしな。ついで新刊もチェックしたいし。

カリカリカリ……。歴史の勉強と称して、時代小説でも読もうかな。っと集中集中。基本的にオレは勉強ができるので、授業の予習復習＋αでそれなりに良い成績が取れるのだが、積み重ねが大事だしね。
成績が落ちると、せっかく勝ち取った『ゲームは一日2時間』の権利が無くなってしまうのだ。ああ、ネット早く繋がらないかなー。

しばらくコツコツ頑張っていると、『そろそろお昼よ」と階下から呼ばれた。もうそんな時間か。

とてとて降りる。うん、カレーの良い匂い。急にお腹が空いてきたＹＯ！

「ちょっと買い物に行って来るから、お留守番お願いね」

こくこく。カレーを食べてるので頷いて返事。

「今日は来ないと思うけど、もし宅配便がきたらこれで払っておいてね」

……あれか。例のゴスロリか。受け取り拒否したらおばあちゃん泣くかな。宅配便爆発しないかな。

黒い顔をしているオレを気にもとめず、母さんお出かけ。あれだな。どうせすぐバレるだろうけど、受け取ったら部屋の押入れにでも隠しておこう。

ーーーーーーーーーーーーーー

ごろごろごろー。ソファを転がりながらテレビを眺める。おもしろくないなー。笑ってもいいんじゃよ？だけはしっかり見てしまったが。タモルさんはまったく老けないよな、不老不死なのかもしれ

ん。

ごろごろごろー。流行の漢流ドラマとやらは、よくわからないな……。このヒゲモジャの男がヒロインなんだろうか？スカートはいてるし。なんか『兄者ー！！』とか叫んでるんだけど。

ごろごろごろー。チャンネルをＮＫＨにしてみた。ちなみにＮｉｈｏｎ　Ｋｙｏｕｓｅｉ　Ｈｏｕｓｏｕの略らしい。見てない人からでも強制的に視聴料を取るからだそうな。うちは結構見るけどね。

子犬と子猫がじゃれあっている映像が流れていた。かわいい。これはボリュームも上げてじっくり見なければ。

子犬『へっへっへ、いい毛並みじゃねえかよう』

子猫『いやー！近寄らないでこのケダモノ！』

子犬『シッポの毛をそんなにふくらませて、いいのか？ここがいいのか？』

子猫『うう、こんなにモフモフされたらアタシもうお嫁にいけない……』

なんだこのアフレコは。

明らかに映像に合ってないセリフが、声優さんによって当てられていた。あなどれないなＮＫＨ……。つか頭おかしい。

アフレコはアレだが子犬と子猫は非常に愛らしいので、見入っていたら母さんが帰ってきた。おかえりー。

ただいま、と言いながら後ろで母さんがガサゴソやっている。包み紙でも開けてるのかな？

テレビでは、子猫が反撃を開始していた。『この貧弱な犬やろぅ！　アタシの肉球をお舐め！』やっぱりこの番組作っているヤツは

頭おかしい。

子猫の肉球パンチに、しばし和んでいると母さんが隣にやってきた。

「アキラ、脱ぎなさい」

手にブラジャーと、女物のパンツらしき物が見えた。

さっと腰を浮かし、脱兎のごとく逃げ出すオレ。だが3歩もいかないうちに、見えない手で投げられるような感触と供に、何故かソファーに座っていた。え？　なにこれ？

「真空投げって言うのよ。さ、脱ぎなさい」

力だけじゃなく技まで充実してるのか……。だがこれしきの事で！　もういっかい！　もういっかい！　空中で一回転させられた。そしてソファーに座っていた。

「次は痛くするわよ？」

抵抗する意思は、完全に失せた。戦闘力が違いすぎる。心折られるってこういう事を言うのか……。

ーーーーーーーーーーーー

心折られたオレは、母さんの部屋で上半身裸のままブラジャーの付け方を教わり中なぅ。
ちなみにパンツは既に履かされてる。トランクスの開放感とは正反対の、ピンク色の小さな布切れ。
なんかライラック系のラダーリボンなんたらと言うそうだが、どうでもいい。思ったよりきつくないのは、ナニがないからか。うぅ……。
ブラジャーは3／4カップ？タイプ。細かいフリルっぽい装飾に、カップとカップの間にリボン。さらにどうでもいい。
「肩ヒモを通した後、腰を90度に曲げて、カップを胸にあてて……」
母さんの部屋は和室。障子のおかげで外からは見られない。大きな3面の鏡台には色々と化粧品？　が並べてあるな。
「ぐっと持ち上げたら、そのまま手を背中にすべらせて、まずはホックを……」
ちなみに父さんの部屋は書斎っぽくなっている。でっかい机に、でっかい本棚。それとは別にPCデスクもあったな。あと観葉植物も置いてあった気がする。
「左手で持ち上げながら、隙間に右手を入れて、脇のお肉を集めて……。アキラ、ちゃんと聞いてるの？」
それとは別に、二人が一緒に寝るだけのベッドルームもある。2階も、オレの部屋とは別にもう一部屋あるし、何気に凄いなこの家。

「アキラ？」

いててててて！　一応聞いていましたが、現実逃避してました！　頭蓋骨割れる、割れるうううううう！

「聞いてました！　ごめんなさい！　脇のお肉なんて余ってません！」

「なにそれ嫌味？」

うわ、こわっ。なんでそんなに怖い顔するの母さん。確かにちゃんと話は聞いてなかったけど、体は動かしてたから、大体言う通りにやってたはずだけど……。

「まあいいわ。あとは肩紐を引っ張りながら、体を起こして……」

「背中のアンダーベルトをきゅっと下げる」

こんな感じかな？ん、ぴっと締まった感じだ。意外と悪くないな。実は結構揺れて痛かったりしてたからな。

肩をぐるぐる回したり、軽くぴょんっと跳ねてみたりする。おおー、ブラジャーいいな！

「サイズやカップは問題なさそうね。でも一応チェックと」

「ひぅっ！？」

胸を鷲掴みにされて、乳首を指で押された。まさか実の母親にもセクハラされるとは。変な声出しちゃったじゃないか！

「な、なにすんだよ母さん！？」

「乳首がちゃんとバストの真ん中にきてないといけないのよ。問題なさそうね」

そ、そうなのか。奥が深いなブラジャー。別にそうでもないか。ところで、何でまだ揉んでるんだろう？くすぐったい。

「母さん……？」

「これで勝ったとか思わない事よ？背中のお肉を駆使すれば私だって……」

聞こえない！　聞こえないぞ！　思わず顔が火照る。だいたい好きで大きくなった訳でもないし、勝手にライバル心を持たれてもなあ。

「まあいいわ、次はこれね。あまり買えなかったけど、明日明後日には私のお古が届くでしょうし」

はいはい、ここまで来たら何でも着ますよ。とりあえずドレスとかじゃなきゃいいや。えーとブラウスにカーディガンにスカートにハイソックス、か？

「タイつきブラウスね。マジックタイプだから取り外しも楽だし、

胸元がオシャレでしょ」

そうですか。

「カーディガンはベージュ色で。白のブラウスに良く合うはずだわ」

んー、よくわかんない。

「スカートは悩んだけど、ライトグリーン地に小花柄で。わざと短いの買ってきたから、動いてもパンツを見せないように練習するのよ」

練習が必要なんですか。

「あとはニーハイ。慣れないうちは脚が寒いでしょうしね。まあ寒いのは基本的に我慢するのだけど」

あ、やっぱ寒いのを我慢するんだ。ズボンでいいじゃんかよ……。

黙々と着るオレ。そう、オレはお人形。着せ替え人形。人形は何も感じない、考えない……。

「まあかわいい。ってアキラ大丈夫？なんだか目の光がないわよ」

「大丈夫デス。ワタシは。お人形さん。デスから」

「まあアキラが壊れたわ」

え？　壊れてないデス。次はどのお洋服を着ればよいデスか？

「まあいいわ。そうだ、いまのうちに写真でも撮らせてもらいましょう」

「心配してよ！　少しは！」

オレは人形から人間に戻った。早かったな。というか写真って。どれだけ撮影好きなの、ウチの親は。

「一昨日まで男だったんだよ！？　少しは気を使ってよ！　あと写真はやめて！」

「下着は百歩譲ってもいいよ！？　でも服なんて今までのでいいじゃない！？　この服も母さんが着れば！」

人間に戻ったら感情が爆発した。なんだよこの服！　これでパンツ見せるなとか無理に決まってんじゃん！　無駄にフリフリしてるし！　かわいいな！　服！

「これ以上ギャーギャー騒ぐなら、こっちのセクシー下着を履かせるわよ？」

黙りました。ごめんなさいお母さん。もう騒ぎません。なんか黒とか紫色が見えた。

「それにいじわるしてる訳じゃないのよ」

「慣れるなら早い方が良いと思って。仕方ないじゃないの、女の子になっちゃったんだから」

うー……。確かにそうかもしれないけどさ。考え込んでいるオレをやさしく撫でながら、そっと肩を抱いて、鏡のほうに向ける。

「かわいいわね、男のアキラもかわいかったけど。ほら、見てみなさい」

確かによく似合ってる。ちゃんと選んでくれたのかサイズもぴったりだし、なんというか愛情を感じる。ってちょっと恥ずかしいな。

「色々大変だと思うけど、私達はちゃんと受け入れるから、アキラも早く受け入れて。お願いだから。」

なんか昨日も同じような感じで慰められたな。ごめんなさい母さん、何度も大騒ぎしちゃって。そうだよな、仕方ないよな、受け入れよう。受け入れる努力をしよう。

「……ごめんなさい、母さん。頑張ってみる。すぐには無理だろうけど」

「私も手伝うから、ね」

ぎゅっと抱きしめられる。ふわっとした、どこか懐かしい感じの甘い香りがした。

「だから、部屋にある男物の服は、全部捨てましょうね」

無理。頑張れない。

ーーーーーーーーーーーーーー

捨てるのだけは勘弁してくれと泣きついた結果、スエット等の一部を残してダンボールに入れて保管、という形に落ちついた。
どこにしまうの？と聞いたら、寝室の押入れに余裕があるので、そこに仕舞うとの事。
二人でダンボールに服をたたみながら入れていく。さらばオレのトランクス。未来でも頑張れよ！

寝室はちょっとだけ狭い。大きなダブルベッドのせいかな。枕元のティッシュの箱に、意味もなくドキドキしてしまう。
しかしこの部屋……。

「なんでオレの写真があちこちに貼ってあるの？」

「楓さんの趣味よ」

きもい。早くも、女のオレ写真が貼られてる。比率としては男3女1ってトコか。

「書斎はもっとすごいわよ？天井まで貼ってるから」

なんだそれは。オレはアイドルか。デジカメ早めに取り上げて正解だったなー。

「枕元にまで貼ってある……。寝る時に気にならない？」

「見られてるみたいで興奮するわ」

そういう意味で聞いたんじゃないよ！　生々しいなもう！　母さんも変態なのか！？

「アキラ、弟と妹どっちが欲しい？ちょっと年が離れるけど美人姉妹もいいわね。私も入れたら美人三姉妹ね」

「好きにすれば！？」

乱暴にダンボールを放り込んで寝室から逃げ出した。

疲れたよ、もう。

一緒にお風呂なんてありえない

またテレビ見てたりして。

つまらないつまらない言いながら、結局見るのかＹＯ！　とか言われるかもしれないが勘弁して欲しい。だってヒマなんだもん。

受け入れよう諦めようと言いながら、オレは男だ！　と騒いでしまうのと似たような物かな？　ちょっと違うか。

あの後は、また着せ替え人形になってマシタ。３セットくらいだったので、そんなに長時間拘束されなかったのが救いだけど。あ、今は最初の服ね。

夕食の下ごしらえを、何故か手伝わされた後、ぼーっとテレビを見てる訳。

ちなみにちゃんと座って見ている。

ごろごろ寝転がりながら見てたら、パンツが見えると怒られた。ソファーの上で胡座をかいて、また怒られた。それ以外でもちょっとした立ち振る舞いで怒られる。

この短時間で累計１０回は怒られているな。こう書くと、パンツ見せすぎだと言われそうだが、見えて無くても怒られるのだ。はしたないとか何とかで。

脚をぷらぷらさせながら、天下の副将軍的なおじいさんが諸国を漫遊する時代劇を見ている。あ、うっかりキュウベイがまたうっかりしてる。

『キュウベイさん、罰としてお昼は抜きですよ！』

『そ、そんな～、ご隠居～～～～』
『ははは、相変らずうっかりだな』
『キュウベイ、ファイトファイト！』

時代劇でファイトって台詞はどうだろうか？　そして唐突にユニカオルの入浴シーン。この人も大概老けないな、不老不死なんだろうか。タモルさんといい、この人といい、怖いな芸能界。

「ただいま帰りました！」

お、父さんだ。覚悟はしとくけど大騒ぎするんだろうな。デジカメはないけど、携帯で写真とれるんだよな。別に良いけど、寝室に貼るのは止めて欲しい。

母さんがいそいそと食事の準備に戻った。やけに簡単な下ごしらえだったけど、夕飯はなんだろなー。

入ってきた。目が合った。おかえりなさいと挨拶をする。無言。なんかぷるぷると震えている。何も持っていない右手をあげて、シャッターを切るらしき動作をしている。怖い。

「ちょ、アキラちゃん、ちょう可愛いですよ！　ええい、なんで僕はカメラを持ってないのでしょう？　ちょ、ちょっと待ってて下さいね！！」

ちょ、が多いな父さん。なんかドタドタと走り去っていった。え、まだカメラあるの？

戻ってきた。なんか画材道具を持ってる。向かいに座ってシャカシャカと何やら筆を動かし始めた。

「愛の力で5分で書き上げて見せます！　だから少しだけじっとしてて下さいねー」

……なんか脱力してしまった。予想の斜め下を行き過ぎているな。ずるずるとソファーから落ちそうになった。

「ちょ、動かないで下さい！　あと2分でいいですから！」

スピードアップしてるな。おっとやばい、ずり落ちてパンツ見せたらまた怒られる。座りなおして、脚も閉じて、うっかり開かないように手で押さえておくか。

「ふおおおおおお、可愛いですよそのポーズ！　３０秒で描きます！！」

サイン会のマンガ家みたいだな。まあいいや、ほっとこう。

「描けました！　アキラちゃんのラブリーさには程遠い出来ですが、見て下さい！」

別に見せなくていいよ。って上手いな！　なんかマンガ調に少しデフォルメされてるけど、この短時間で描いたとは思えない出来だ。

良く見ると、ふきだしがついてて『お父さん、大好き』というセリフが書いてあった。そんな事は一言も言ってないのだが。

「さて、次の作品をと」

まだ描くのか。うっとおしいな。仕方ないので、携帯で写真撮れば？と教えた。更にうっとおしくなった。５秒毎にピー、カシャッとかありえない。

「うう、メモリーが……」

そりゃそうだろう。なんかしくしく泣き出した。よく泣くな、オレがすぐ泣きそうになるのは遺伝だったのかな。

「アキラちゃん、お願いだからデジカメを返してくれませんか？」

絶対にイヤだ。デジカメの代わりに、この言葉を送ろう。あ、本気じゃないよ。念の為にいっとくけど。

「お父さん、大嫌い」

固まった。すごいな。ピクリとも動かない。

効　果　は　バ　ッ　グ　ン　だ　！

「ご飯できたわよー」

やけに早いなーと思ったらラーメンだった。納得。でも珍しいな、夕飯をこんな簡単な物で済ますなんて。口では手を抜くとか言っても、きっちり作る人なのにな。

父さんはまだ動かない。仕方ないので、『ウソだよ父さん、一緒にご飯食べよ？』と言ったら再起動した。なんかうれしそう。

調子に乗られても困るので、一応釘を刺しておこう。

「でもまたデジカメを返せと言ったら、ウソじゃなくなるかも？」

「デジカメって何ですか？」

うん、わかればよろしい。

ーーーーーーーーーーーーー

ふう、ごちそうさま。美味しかったな、やっぱり母さんは料理が上手だ。

「楓さん、今日のご飯に何か思う所はないかしら？」

「え？　普通に美味しかったですよ、桜花さん」

「ありがとう。でも実はかなり節約させてもらったの」

「ふーむ……。なにかあったのですか？」

「ええ、実はアキラにもっとお洋服を買ってあげたくて」

なにそれ聞いてない。

「若い娘なのに下着も5着しかないし、私って家計管理のヘタね。母親失格だわ」

「こ、今月のお小遣いの残り全部です！　どうぞ！」

「まあ、ありがとう。これであと3着は買えるわ」

なにそれ下着ってそんなに高いの？

「でもお洋服までは無理ね、ああ、三日に1回は同じ格好をしなきゃいけないのねアキラは。ごめんなさい」

別に構わないけどな。あ、父さんが出て行った。そして戻ってきた。

「ぼ、僕のヘソクリ全部です！　これで大丈夫ですよね！？」

父さん騙されてるよ！　気付いて！　あ、母さんがにらんできた。ごめんよ父さん。

「ありがとう、でもアクセサリーやバックまでは無理ね。アキラも女の子らしくしたいって言ってくれたのだけど……」

どどどどどどどどど……。うわあ、父さんかわいそう。どどどどどどどどどど……。もどってきた。

「こ、これ！　隠し口座の通帳です！　これで何でも買って下さい！」

「ありがとう、ついでに私の分も買って良いかしら？」

「ご自由に！　だから……だからアキラちゃんに可愛い格好を……！」

「もちろんよ。よかったわねアキラ」

「え……、うん……。ありがとう？」

「ふおおおおおおおおおおおおお！　いいんですよ、これくらい！　ちょっと明日から残業するかもしれませんが！」

なんか可哀そうになってきた。写真くらいは黙って撮らせてあげようかな。母さんがニコニコしてる。怖い。

ーーーーーーーーーーーーー

効率が悪いと思いつつキッチリ勉強した。うん、我ながら真面目だ。
んじゃお風呂に入ろっかな。下着は……。この比較的シンプルな青色のにするか。ところどころレースっぽいのが付いてるのは母さんの趣味かな？慣れるしかないか。
パジャマも新しいのになった。ネグリジェとか持ってこられたら流石にきつかったが、幸い普通のギンガムチェックの上下。色がピンクなのは我慢しよう。

「きゃーーーーーーー！」

脱衣所に入ったら半裸の父さんがいた。

「あ、ごめん。また後で入るね」

「スルーですか」

スルーするに決まってるだろ。

「久々にアキラちゃんも一緒に入りませんか？」

じっと父さんを見る。普段派手に殴り飛ばされてる割に、結構いい体してるな。細身なのに筋肉質とか。オレもそういうのを目指してたのに。悔しいから、絶対一緒に入らない。

「小学生まで一緒に入ってたのに……」

はいはい、マンガでも読んで時間つぶしてこよっと。

思いのほか読みふけってしまった。お風呂お風呂と。
ん、さすがに父さんは上がったみたいだな。では脱衣スタート。

スカートは簡単に脱げるな。ブラウスはボタン多いな。ブラジャー。よっ、ほっ、よし。ホック外れた。パンツと。小さい。なんか全般的に防御力が低すぎる装備だ。
男物が防御１０だったら、４くらいじゃないのかこれ。くだらない事を考えつつ脱衣完了。風呂場の電気をつけて、と。

中に入ったら、湯船に水死体があった。

「父さん！？　なにやってんの！？」

多分オレと一緒に入りたくて湯船で待ってたんだな。ご丁寧に、着る物を片付けて電気まで消して。そこまでして一緒に入りたいかな、１時間は経ってるぞ。

「父さん？おーい、お父さん？」

返事が無い。揺すってみる。無反応。というか頭までお湯に浸かってる！？ちょ！

頑張って湯船から出そうとするけど、重くて持ち上がらない！

なんとか肩口まで引き上げたけど……。息してないＹＯ！　どうしよう……、どうしよう！？

「お母さん！　おかあさーん！？　たすけてえええええええええ！！」

オレは昨夜とは別の意味で悲鳴を上げた。

なお、母さんはボディブローで父さんを蘇生させた。
息を吹き返した後も、黙々とボディブローを繰り返す母さんを、オレはお風呂場の片隅でガタガタ震えながら見ていた。

「外でやってくれないかな、寒い……」

ま、父さんが生き返って良かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8949z/

美少女なんてありえない

2012年1月4日01時45分発行